

玉

藻

第 六 号

昭和四十五年五月三十日発行

玉 藻 第六号 目 次

助詞「し」について……………	佐藤信子……………	1
宇治拾遺物語の世捨人説話について……………	立間和子……………	10
童話文学における芸術的文学的価値性について・序……………	飯野敦子……………	17
八木重吉研究……………	宇高悦子……………	23
随 想……………		
「春の雪」……………	白石文子……………	28

立教大学日本文学会

「文学論藻」第四十二号

東洋大学国語国文学会

「電子計算機による国語研究(二)」

国立国語研究所

「紀要」第三号

ノートルダム清心女子大学国文学科

「文林」第三号

松蔭女子大学国文学研究室編

「金城国文」第四三号

金城学院大学国文学会

「逐次刊行物目録」昭和四十二年版

国立国会図書館

「中国古典研究」第十六号

早稲田大学中国古典研究会

「紀要」第二号

調布学園女子短期大学語学研究会

「日本文学」第三十三号 東京女子大学

「紀要」第十二号 青山学院大学文学部

「研究論集」第四集

帝塚山学院大学日本文学研究室

「野州国文学」第四号

国学院大学栃木短期大学国文学会

「日本文学」198

日本文学協会

「人文科学科紀要」第四八輯 国文学、

漢文学XIV 東京大学教養学部人文科学科

「国文学研究」第五号

梅光女学院大学国文学会

「成蹊大学文学部紀要」第五号

成蹊大学文学会

編集後記

此頃は果たそうと思ひながら、意にまかせぬことが多い。わたくしが不器用で、しかも怠惰であるせいだが、本号の刊行がおくれたのも、理由の一端はそこにかかわっている。そればかりではないという逃げ口上もあるけれども、諸般の事情をつらねてみたところで、自分の心の重荷が軽くなる訳でもない。不器用は不器用なりに、怠惰に鞭打って仕事は果たさねばならぬ。

本号は第二回目の卒論特集とし、この三月に卒業した諸君の論文から四編をえらび、全体の論旨を要約していただいで、ここにまとめた。ただ飯野敦子君のものは、海外旅行の関係で連絡がとれず、「童話文

学における芸術的文学的価値性について」と題した論文のはしがきの部分をそのまま掲げたことを、お断わりしておく。それぞれ行文・措辞など細部に及べば、熟さぬところもあろうが、問題に取り組むその姿勢に個性的なもののある点を、評価したいと思う。以上四編のほかに、四年の白石文子君の随想「春の雪」を加えた。今後このような形で、学生諸君の文章を掲げていきたい。すぐれた成果を広く国文学会員の間に求めることは、研究誌としての本誌を一層充実させる適切な方法だと信じるからである。

玉 藻 第六号

昭和四十五年五月二十五日 印刷
昭和四十五年五月三十日 発行

フェリス女学院大学国文学会

編集兼 代表者 遠 藤 祐

印刷人 篠 倉 政 一

発行所 横浜市中区山手町三七
フェリス女学院大学

国 文 学 会